



在任4カ年の回想

第10代学校長 宮崎徹二郎

昭和50年4月上郡高から芦屋高に着任して、54年4月に姫路東高へ転補されるまで、足かけ4年あまりお世話になった。その間、芦屋古典文学の舞台となっていた芦屋浜海岸や、芦屋十景の一つで自然美を今に伝える「阿保親王塚」の森などを訪れた当時の懐しく思い出される。

芦屋高在任の4年間を回顧して、印象深い思い出を辿って見たい。その一は、芦屋高に赴任の際、県当局から教育の正常化を強く要請された。それは、進路保障の立場から認めていた4名の加配教員を51年度から1名ずつ減らして、正規の定員へ返すということである。加配減によって生じる学力保障をどうするか、思索を重ねながら校務運営委員会に回り、さらに職員会議で衆智を集めてより密度の高い教育内容の充実に努めた。その際、県教委に南館のピロティを利用してカウンセリング室の設置を要望した。幸い52年度に3室からなる生徒指導室が完成し、多様化した生徒の生活指導や学力増強に活用する一方、教職員の懸命な努力と相俟って学力保障の実を上げることが出来た。

その二は、芦屋高創立以来の伝統美である「自治・自由」の尊さである。時代の風潮に流されず、体制に追随せず、自ら考えながら行動するという自律の気風に感銘をうけた。そんな校風の中で育った卒業生の内で私の心に焼きついたのは、児玉隆也氏の足跡である。氏は有能なルポ・ライターで将来を囑望されていたが、50年に惜しくも38才の若さで急逝された。当時、朝日新聞の天声人語で「<田中角栄研究>のルポを書き、ペンの砲列でその退陣に追い込んだ果敢なジャーナリストだった」と、氏の業績を称えている。同年、奥田先生が芦屋高図書館で「児玉隆也の追悼展」を開かれたが、その著書、書簡等を通して、氏の高潔で反骨、頑固なまでに真実を追求されている一途さに深い感動を覚えた。

それと同時に、このような人材を育てた芦屋高の基盤には、教職員の個に即して自らの課題に取り組む志と情熱が支えになっていたと思うのである。芦屋高には個性豊かで研究熱心な先生方が多い。これも芦屋高の伝統的な強みであろうか。多忙な校務の中で、自己の研究論文を日本海事史学会の学術雑誌に発表される方、芦屋・神戸市教委から委嘱され郷土史・民俗学の分野で活躍している方、また学年行事・クラブ活動において独創的な指導で成果をあげている先生方等、実に多士済済であった。感受性の強い生徒諸君は、自らの人生に多くの指針を得たことと思う。何かを求めてやまない教師であってこそ、何らかの意味で生徒の能力を伸ばすことができる、という信条を芦屋高で味わったのである。

終わりに、学校施設について申しのべたい。教育活動の円滑な運営は、施設・設備の拡充が緊急と考え、関係職員と協議し、51年度は体育館の床総張替え、52年度には生徒指導室の設置、53年度は要望の強かった格技場の建設を進めた。この格技場は、柔・剣道場を中心に、バレーコート・卓球場を含む総合的な第2体育館の建設を目指して県教委へ要請したが、当時は経済の低成長下にあって実現は容易でなかった。53年に予算化されて54年に完成したが、規模は縮小され規格型の建物になったのが今なお心残りである。

次は、芦屋高の懸案であった本館の総改築である。当の本館は、昭和2年に旧宮川小学校の校舎として建設された建物で、当初は西洋建築風の外観と内部の造作が話題を呼び名物校舎であったが、20年8月の空襲で内部が焼失し、その後は手を加え引き続き使用していた。しかし、小学校校舎だけに教室は狭く、また天井が低くて暗いなど環境も悪く、早期建て替えが急務であった。歴代の学校長は県教委へ陳情し、総改築の実現に腐心されていた。私も繰り返し県に改築を要望していたが、県当局は54年2月、神戸大の金谷教授に委嘱して耐震検査を実施、その結果次第で総改築に踏み切ると回答を得たので、近く建て替えが具体化するものと期待しつつ芦屋高を去った。いま装いも新たに竣工した本館の威容に接し、県当局のご高配と関係各位のご尽力に深謝申し上げると共に、過去を顧みて感慨一入である。

時代は変わっても「自治・自由」の麗しい校風は不動である。芦屋高校創立50周年を寿ぎ、ますます飛躍発展されるよう心から祈念してやみません。